

千住橋

(略) 註 そもそもすみだ川の橋は源平盛衰記(中略)中一遍ひじりの繪(中略)畫に長橋一條あり、板橋(中略)年八月、聖戒行人の撰詞にて、畫は法眼圓伊の筆、十などにうき橋、またはなべてのさまなる板橋をもわたせるよしあり。(略) 註 享保年間おほやけより船橋をまうけられしこもありといへり、よしやははじをつくり、(略) 註 中里人のつたへ言にも、今より三百年ばかりむかしに所の長者がつこの文臺にせしは、いづれの時の橋ばしらの名ごりにもあれ、それはそれとして、だにうもれ木とのみいひてんとて、もてはやすら、翁のみやびごゝろのかうばしきこそ、かへすべくもゆかしけれ、文化十三年といふとしの文月のついたちの日、あづまのみやこの神田川邊なる松かげの家ゐにて、高田興清筆をそむ。

〔書言字考節用集十數量〕 東武三大橋(中略)

〔三王外記 憲王〕 浅草川舊有二橋、各長數十丈、一曰仙壽橋。在仙壽驛(中略)下

〔國花萬葉記〕 武藏(七下) 千壽橋(中略) 三(内) 大橋 浅草川上

〔江戸鹿子〕 五大橋(中略) 千手橋 浅草川上に渡

〔江戸砂子〕 千住大橋 長六十間ほど 荒川に渡

〔江戸名所圖會十七〕 千住大橋 荒川の流に架す、奥州海道の咽喉なり、橋上の人馬絡繹として間断なし、橋の北壹貳町を経て驛舍あり、此橋は其始文祿三年甲午九月、伊奈備前守奉行として普請ありしより今に連綿たり。

〔武江年表〕 文祿三年九月、千住大橋を始て掛らる、此地の鎮守、同所熊野權現別當圓蔵院の記錄にて橋柱支ゆる事あたはず、橋柱倒れて船を壓し、船中の人水に漂ふ、伊名侯、熊野權現に祈りて成就すといふ。

〔東都歲事記〕 六月九日 千住大橋綱曳(綱をひきあひ)、其年の吉凶を知る。